(4) 小麦の品種改良－１（国立農試）
－一度消えた育種の灯が再開－

北海道開拓使は、府県や欧米から小麦品種を導入・試作して栽培を奨励しましたが、本格的に育種試験が開始されたのは、明治34年の北海道農事試験場の発足以降でした。当初はアメリカからの導入種の中から、北海道に適応する品種を選抜する、品種選抜試験が行われ、秋まき小麦では「マーチンス・アンバー」、「赤皮赤」、「ドーソン」、春まき小麦では「札幌春小麦」、「ミネソタ」などが選定されました。これらの品種は、今の品種とは違って純度が低くかったため、その中からより優良な系統を選抜する純系分離育種が行われ、「マーチン８号」、「赤皮赤１号」、「ドーソン１号」、「札幌春小麦９号」、「札幌春小麦10号」などが大正期に育成され、小麦の普及に貢献しました。

しかし、これらの品種は、第１次大戦後に頻発した赤さび病によって、著しい被害を被ったため、海外から春まき小麦、秋まき小麦併せて385品種を導入し、大正６、７年の両年に母本の選定を行い、春まき小麦では「ベロツルカ」、秋まき小麦では「ターキーレッド」などの赤さび病抵抗性母本を選抜し、交雑育種を開始しました。この事業には、大正６年から10年間にわたる、日本製粉株式会社の研究費援助が大いに役立ったことを、当時の農事試験場種芸主任であった我孫子孝次氏は、「北海道農業よもやま話」の中で述べています。その結果、昭和２年に赤さび病抵抗性の秋まき小麦「赤銹不知１号」(ターキーレッド×マーチンス・アンバー）が、昭和５年に春まき小麦「農林３号」（札幌春小麦×ベロツルカ）が育成されました。「赤銹不知１号」は、それまでの石狩・空知地方が中心であった秋まき小麦栽培を、道東地方まで可能としましたし、「農林３号」は、当時まだ研究が進んでいなかった小麦種間交雑（durum×aestivum）で育成された、世界初ともいえる実用品種で、その研究経過が記載されなかったことを、我孫子孝次氏は同じ本のなかで悔やんでいます。

北海道は、小麦栽培開始以来、HRWやDNSなどの銘柄構成品種が、品種改良の母本となったこともあって、我が国で最も良質な硬質小麦を産すると

評され、製パン性の向上が、品質改良の大きな目標でした。国産の秋まき小麦としては、現在でも最も高い製パン性を有する秋まき小麦「農林８号」が本場で、カナダの１CWに近い製パン性を有する春まき小麦「農林35号」、「農林75号」が北見支場で、それぞれ育成されました。しかし、これら品種は、長稈で倒伏に弱く低収であったため、あまり普及しませんでした。

小麦の栽培を安定させるためには、短強稈、早熟にする必要があるということで、府県品種との交雑が盛んに行われました。その結果、短強稈直立型で、その越冬性は典型的な耐雪型の特徴を有する「農林62号」が昭和18年に、従来の春まき品種に比べて短稈、早熟で、しかも多収な「農林29号」が昭和13年に、それぞれ育成されました。

昭和25年に農業試験場は、それまでの一体的な運営から、国立と道立の分離が行われました。戦後の食糧増産を背景に、開田が進行した道央地帯では、小麦栽培が皆無に等しい状況となったため、北海道農試の小麦育種は、昭和44年に中止されました。

しかし、間もなく稲作転換事業が開始され、道央地帯の小麦栽培面積が急増するに及んで、昭和57年に育種が再開されました。また、我が国最大の主産地に変貌した、十勝地方の小麦作に対応する必要から、平成８年には札幌市豊平区羊ケ丘から、芽室町に育種の場を移して、主に製パン適性が高い秋まき小麦の品種育成を続けています。

＜桑原　達雄＞